

昨年末から、日本で「台湾原住民文学選」全5巻の刊行が始まった。

憲法上「台湾原住民」として認定されている11の民族は、5000年前ほどから断続的に台湾本島とその周辺の離島に渡ってきたといわれ、言語学的にはおおむねアウストロネシア語族に属するとみられる。

この21世紀、電子工業の発達したこの太平洋上の一角に、かくも多くの先



住民族が命脈を保っているということと自体、驚くべきことである。

台湾は九州よりひとまわり小さい。その島の40万人に満たない民族に文学と呼べるものが体系的に育っているのか、ましてや全5巻の選集などを出しているのかという声が、とうぜんながらある。

「台湾原住民文学」の定義を編集委員である天理大学の下村作次郎教授

は、1980年代の台湾の民主化のなから生まれしてきた新しい文学であり、原住民が自ら表現者として自分たちの世界を描いた文学」と定義している。

すなわち先住民自身が自らの手で自らの世界を描いた文学であるという点で、この選集は特筆される。まして特定の地域の先住民文学がこうして第三国で整理されその全容を網羅

第十回

失われ行く

民族の魂を綴る

——柳本通彦

する形で出版されるというのは、極めて異例のことである。

そこには、いま台湾原住民のおかれている複雑な社会環境と、台湾原住民と日本人とのふしぎな「縁」ともいべきものが背景として存在している。「台湾原住民作家」といわれて、10人、20人の名をあげることはいまや難しいことではない。彼らの多くは、30代から50代にかけての既婚者で、公務員で

あったり教師であったり、それぞれ職業をもちながら、ここ10年ほどの間に執筆活動に入った人たちである。

彼らは成長した自らの子どもにも民族の言語や文化がまったく受け継がれていないことに愕然とするとともに、自らの少年期に家族や村の古老から聞き取った山や海にまつわる物語を思い出して身が締めつけられるような感慨をもったという点で共通性

ある。

そして、そうした人たちの営みに目を留め、台湾本土に先んじて彼らの仕事をまとめて世に出そうとした日本人がいたという点にも驚かされる。翻訳などで、このプロジェクトに関わる日本人は十数人に達する。しかもみなボランティアである。

とある大手出版社が台湾に関するレポートを集めて1冊の読本を計画したところ、参加した研究者の多くが原住民に関わるテーマを選んで、編集者を困らせたことがあった。最近とみに増えた日本からの留学生たち、彼らの多くも台湾原住民との接触が来台のきっかけになっている。

年代を越えて日本人の彼らへの異常とも言える関心は、実に不思議なものがある。

50代にかけての既婚者で、公務員で

がある。失われ行く民族の魂をなんとか文字に留めようとした自覚的な知識人がこの十数年にどつと輩出したとみることができると。それだけ彼らの文化は危機に瀕しているともいえる。しかし原住民には文字がない。彼らの多くは、「台湾国語」すなわち北京語でなんとか祖父母や両親の言葉、あるいは自らの体験を小説、散文、詩歌などさまざまな形で綴ろうとしたので



「台湾原住民文学選」は東京章風館より1年をかけて刊行。各巻2800円。